垂水史談会報

2020（令和2）年
7月発行　垂水史談会
第 39 号

【報告】

国指定「垂水島津家墓所」が被害

令和2年3月に垂水市で初めて国指定となり、今後、郷土教育や文化財としてさらなる活用が期待されている「垂水島津家墓所」は、7月4日以降の大雨により裏山が崩れ、一部の墓石が土砂の被害を受けました。垂水市民にとって大きな痛手となりましたが、早急な復旧を願ってやみません。

しかし、幸いに被害は一部にとどまっており、少なくとも下段の墓地部分は被害はなく、当面の文化財巡り等には影響はないと思われます。

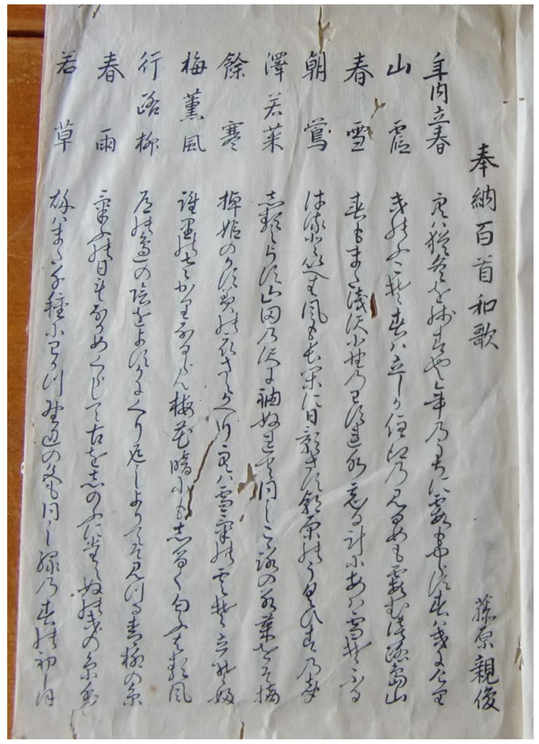
なお、市内にある多くの文化財や史跡等は天気が回復し次第、詳しい調査が必要です。

皆さんのお近くの文化財等は大丈夫だったでしょうか。

垂水麓の旧家の収蔵文物を調査

五月から六月にかけて垂水麓の旧家、K家とH家収蔵の文物を調査しました。

その結果、K家では十八世紀半ばにK家の別荘で催された宴で詠まれた和歌や漢詩作品が集められた巻物を見せていただきました。併せて手貫神社に保存されている、住吉神社の奉納和歌など複数の文学作品の存在が明らかになりました。



これまでも垂水麓の武士たちが、武芸百般に秀でていたことは知られていたことですが、和歌の道などにも通暁していたことを示す重要な文物です。

また、H家では当家が幕末から明治にかけて垂水家の家令を勤めていたことから、関係のあった当時の政治家や書家の書画作品を確認することが出来、H家が重要な位置にあったことを物語るものと言えます。

両家の文物は垂水の郷土史に肉付けをするためにも垂水にとっても重要な文化財でもあることから、今後、これらの文物をしっかりと分析し、詳しい背景などを調査する必要があります。さらに、保存や管理をどうするかは今後の重要課題です。

【研究ノート】

【日清戦争の記録】

忠魂碑（日清戦争記念碑）②

―鹿児島神社（俗に下宮神社）内―

①是此勇士遙雖享舊領主高祖之餘烈奉公之志篤而深重国
是能守軍規之由所致焉抑亦無不基我　今上皇帝陛下之
②稜威也矣嗚呼有血有涙之人誰以有不感此義慨與　聖徳

者哉況籍此邑者茲軍僚郷黨相議建此碑欲永録忠歿者之
功且爲後人之鑑矣新納時哉代于發起者謹誌焉
明治参拾参庚子歳涼秋拾月

【注】

①・・先人の残した功績。②・・天皇陛下の威光。③・・軍の関係者。ここでは在郷軍人。④・・当時、垂水小学校校長。水之上小学校や柊原小学校校長を兼任。号は楽山。著書に「多級複式教授法講演」「神州根本教育理想統一訓」鹿児島県視学。⑤・・１９００年

【「忠魂碑」の背面。文字の剥落が激しい。】

【読み下し】

是れや此れ、勇士遙かに旧領主・高祖の余烈を享け、奉公の志篤くして深く国是を重んじ、能く軍規の由って致す所を守ると雖も、抑も亦た我が今上皇帝陛下の稜威に基かざる無きなり。嗚呼、血有り、涙有るの人、誰か以て此の義慨と聖徳とに感ぜざる者有らんや。況や此の邑に籍する者をや。茲に軍僚・郷党相に議して此の碑を建て、永く忠歿者の功を録し、且つ後人の鑑と為さんと欲す。新納時哉、発起者に代りて謹んで焉れを誌す。

明治三十三庚子の歳、涼秋十月、在郷軍人　　發起者

【新しく整備された「忠魂碑」】

【口語訳】

じつにこの勇士たちは遙か昔から垂水島津家の旧領主やその先祖の残した恩を受け、奉公の志が篤く、深く日本の国策を重んじ、よく軍規の極めるところを守った（勇士たちではある）けれども、そもそもまた一方では、わが今上天皇陛下のご威光に基づかないものでもないのである。

ああ、血や涙を有する者なら、（この度の戦役において）この大義に対する怒りと天皇陛下のご聖徳とに感激しないものがあるだろうか、（感激しないものはない）ましてやこの垂水に籍を置くものは勿論のことである。

ここに在郷軍人や郷土のものが共に協議してこの石碑を建て、末永く忠義に戦没した者の功績を記録し、且つ後人の鑑とすることを願うものである。

（そこで）新納時哉は発起者に代わり、つつしんでここに誌す。

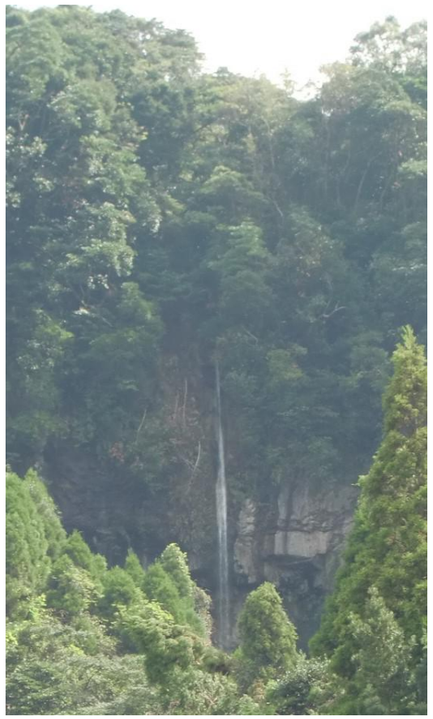
―この稿終わり―

（読み下し・口語訳等：上園正人、瀬角龍平）

【　名所旧跡を訪ねて　】・・・宍籠の滝

天保十四（一八四三）年、薩摩藩で編纂された『三國名勝圖會』には各地の自然・寺社・物産等が記述され、牛根編には「宍籠瀑布（ししごめのたき）」のことが『高さ十五間（一間は約一、八メートル）、広さ一間ばかり、左右は石崖にて下は樹木欝然たり』と紹介されています。

瀑布とは滝のことで、二川の国道交差点から百引方面へ約八百メートルほど東へさかのぼると、左上方の山中から滝が杉木立の中に落ち込んでいます。今は、滝つぼの近くに植林された杉が繁茂しており滝も細く探すのに苦労しますが、水量の多い時期には国道の橋の上からも見えます。



また松崎川にかかる寺下橋の向こう岸に墓地がありますが、ここはむかし垂水心翁寺（曹洞宗）の末寺・喜翁院があったところです。いまはお坊さんの墓（無縫塔）が数基残るばかりです。

―たるみず春秋―

校了の熱き珈琲木の芽雨

丸山　眞

製本するまでの道のりは、原稿集めから校正作業がそのエネルギーの大半を占めるといってもいいだろう。原稿の文字の確認、修正はもちろん未提出者への連絡、印刷会社との打ち合わせなど、なまなかなことではないのだ。

さて、クリップで留めて原稿校正はすべて終えた。あとは印刷会社の受け取りの来るのを待つだけ。熱くいれたコーヒーを飲みながら仕事をやり終えた安堵感に身をひたすひと時である。至福といってもいいかもしれない。

戸外の雨の中の木の芽が新鮮に見えてくる。

（文章：瀬角龍平）